
尋ね人の欠片

吟遊詩人 涼一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尋ね人の欠片

【Nコード】

N6438Y

【作者名】

吟遊詩人 涼一

【あらすじ】

片鱗を集めて繋げば、たくさんの人がいる。
独りに見えても、そこにはたくさんの人がいる。

女の子との進行

お父さんを探しているの。

お父さん、どこにいるの？

見つけれないの。

明日はお父さんと一緒に近くの海の見える高いところまで行く約束だったのに。

お家には誰もいないし、お母さんはお父さんを探しに行つたままもう何年も経つの。

お母さんがいなくなつて、でもすぐにお父さんは帰ってきた。お母さんがいなくなつたから、お父さんと私の二人だった。

ずっとお母さんに会いたかった。

お父さんは、明日になったらお母さんに会えるつて、お母さんに会いに行こうつて、そう言っていたの。だから私、お父さん見つかるまで、お父さん探すの。

そしたらお母さんも帰るの。

またお母さんとお父さんと暮らすの。

ずっと泣いてばかりいたけれど、泣き虫は嫌いつてお父さん、言っていたもの。私泣かないよ、お父さん見つけるの。

お兄ちゃんも一緒に探してくれる？

お兄ちゃんはどこから来たの？ お兄ちゃんも何か、探してるの？

？ 独りで、寂しくないの？

誰を探してるの？ きつと、大切な人でしょう？ お兄ちゃんは強いから、きつと見つかる。泣き虫はすぐに負けちゃうもん、お兄ちゃんは負けないよ。

でもお父さんもお母さんも泣き虫だから……弱虫だから、すぐに負けちゃうかもしれない。だから私が助けてあげなくちゃ、お父さんとお母さん、一緒にいられないの。

私、強くなるの。それでお母さんとお父さんを守ってあげる。

お兄ちゃん、私こっちを探すね。大丈夫、私は迷子になったりしないよ、だって聞こえるでしょう？ 近くにお母さんがいるよ、泣き声が聞こえる。

お兄ちゃんはお兄ちゃんの大切な人を探して。私はもう平気、独りでも寂しくないよ。

少しだったけど、ありがとう。暗くて目が見えにくいけど、お兄ちゃんが手を引いてくれたから、ここまで来れたよ。

今は声が聞こえるから目が見えなくてもいいの。

それよりお兄ちゃんは、どうして独りで歩けたの？

あつ、お母さんが行っちゃう……。

私もう行かなくちゃ。

さようならお兄ちゃん、また会いましょう。

彩夏の受信ボックス

「冬菜」

8 / 1 6

宿題終わった？

8 / 1 7

宿題終わった？

8 / 1 8

学校やだな

あやかは学校好きだよ

私は嫌い

大嫌い

8 / 1 8

もう消えたい

私が私じゃないみたいになるの

8 / 1 9

今日暑い？

熱中症とか気をつけてね

8 / 2 0

おめでとう

会えないけど、あやかのこと大好きだよ

8 / 2 5

助けて

怖い

8 / 29

ありがとう

8 / 30

ごめんなさい

大丈夫、あやかのせいじゃない

私のせいだから

私が悪いの全部

8 / 31

また会えるから

0 : 00

忘れたの？

彩夏との進行

まだ夢が続いているようだった。身体中を小さな何かが這って廻って、その爪は小さく痛い。

君の夢に出てきた日は、まるで悪夢のようで、どうかその日が訪れないようにと願っている。

安らかな夢だった。君は笑っていた。

でも夢は叶わない。

夢は叶わないから夢のまま覚める、そして現実が続く。その夢は叶わない。そして君の笑顔も夢の中、美しい暗闇の中に消えていった。

住んだ世界が違うなら、僕も君とは目も合わず。

いつか君は忘れてく、僕の夢を、僕との夢を。

誰かが倒れている。

細い体は静かに揺れた。

「どうしてこんなところにいるの？ 危ないよ、早く逃げて」

暗いもやが視野を縁取り、辺りの木々を燃やしてる。誰かは暗闇の中から這い上がり、そして僕に言った。

「私が見えるの？」

僕には見えた。彼女は見えていない。そこは暗闇、何もなければ、何も見えない。

僕の目とは違う何かが、この闇の中の姿を映している。輪郭のない形は静かに踊って、何かが違う。

「君も逃げなくちゃ」

傷を負う彼女に言った。僕の声じゃないみたい、でも声は僕のもの。「私はこの先に行かなくちゃ」

闇は闇、中に紛れて知ることとは、光の中にいたことと、戻る仕様はどこにもないこと。

冬菜の思い出1

あやか、どこにいるの？

なんだ、そんなところに……。

どこへ言っちゃったかと思った。これ、かくれんぼって言うのね、つまらない。

鬼になったら独りで探さなくちゃいけない、私嫌だ。私はすぐに見つけちゃうし、みんな隠れるの下手。

あやかも下手、それじゃあみんなに見つかっちゃうよ。みんな見てるよ、どこかで。

ねえ、もっと楽しいこととして遊ぼう？

ずっと一緒にいられるの。

いいよ、みんな隠れてるんでしょ、今のうちに逃げようよ。
向こうの方に面白いものがあるの。

どうして、いいじゃない。ちょっと痛いだけでしょう？

指を出して、目を閉じて。

そしたらきらきら、楽しいところに行けるの。たくさん光があつて、怖いものなんて一つもないの。お化けもないよ。

でもあやかは見えないから、危ないかもしれないね。

安心して、私がついてるから。私があやかの手を引いてあげる。

暗い場所でも手を繋いでいれば大丈夫。

痛くない？ 痛いよね……私がもっと守ってあげなくちゃ。

怖くない？ 怖いよね……私がもっと守ってあげなくちゃ。

誰かいるよ、一緒に逃げよう、追ってくる。

帰りたいの？　だめだよ、帰り道にはあんなにたくさん……もう戻れないよ。一緒に行こう？　お母さんもお父さんも、いつも通りだよ。

帰るときにはまた同じ場所に帰れるよ。私達はここにいればずっとこのままでいられる。

ねえ、隠れたりしなくていいの、かくれんぼもなくていいんだよ。ずっと一緒なの。ここでいつまでも遊んでいよう？

……あやか？

……。

あやか、かくれんぼ楽しいね！　他には誰も隠れていないんだもん。二人だけのかくれんぼ、私大好き。

これ、かくれおにつて言うのね、好きだよ。

だってあやか追いかけるの楽しいの。独りじゃない。かくれんぼで独りになるより、二人でおいかけっこするの、すごく楽しいよ。

でもね、あやか。

言っただけでしょう？

そんな隠れ方じゃ、すぐに見つかっちゃうよ。

母との進行

めのん……めのんなのね。

ここよ、おかあさん、ここにいるよ。よかったね、やっとあえたね、もうだいじょうぶね。

おかあさん、おうちどっちかしてるからね、いっしょにいこうね。

おとうさんはいっしょじゃないの？ ……いっしょじゃないの？
めのん、どうやってここにきたの？

一人できたのね、こわかったでしょう。まっくらだったでしょう。
めのんはすごいね、おかあさん、こわくてあるけなかったよ。

おとうさんもないの？ おとうさんもさがすの？

でもおかあさん、たくさんさがしたから、もうおとうさんいない
みたいよ。もうおうちかえっちゃったのかな。 え、なに？ ちが
うの？ こえがきこえたの？

おとうさんのこえがきこえる？

いいの、おとうさん上からよんでるのよ。
いっしょにいこうね。

おうちにかえろうね。

業務連絡

君の娘の名前を何て言っただかな。

……そう、メノンと言ったか。

とてもかわいい女の子で、よく見ると私の小さい頃よく遊んだ姉さんに似ていて、年のわりに大人しかった。

他人の娘をこんなに愛しく感じるのだから、父親である君にしたら大変なものだろうな。

ただよく言うのは、女の子は小さいうちはいいが、大人になるとだんだん父親から離れていくようになるというやつだ。

メノンちゃんを見ていると、俺の娘の小さいときを思い出す。また会わせてもらえないかと。

そうか、すっかり俺のことは嫌ってしまっただか。

一緒に遊んでくれないのは、俺が嫌いだからなのか。

まさか、羨んでいるわけではないが、君のことは少しばかり羨ましいのかもしれない。

……君が信じてくれなくてもいい。ただ俺のことを聞いてほしいのだが……。

たまに、メノンちゃんは俺の子の生まれ変わりのようなんじゃないかと思うんだが、どうだろうか……。

妙なことを訊いてしまったようだった。

人の娘にこんなことを思うのはおかしいかもしれないが、しかし……。

あの子にそっくりなのだ。

かわいい女の子で、小さくて、まるでずっと時間が止まったようなんだ。

メノンちゃんは、たまに不思議なことはないか。変わったことはないか？

メノンだけでも逃がすべきだ。君が信じなくてもいい、ただ何か
がメノンを追っているんだ。

これは業務連絡だ。
俺の命令は絶対だ。

あの穴の崩れる前にお前は坑夫をやめるんだ。

芽音のおまじない

ふねはとても小さくて、二人しかのれなかった。おかあさんは川につながれたくさをほどこいた。

くろいかげのたくさんがれる川を、小さなふねなのにすすめるのはなんですか。

でもふねは小さいからとても大きくゆれた。右に左に、わたしたちを水の中にみこもうとしているみたい、お皿の中のわたしたちをくろいおさかなさんたちがたべようとしているの。

「めのん、ちゃんとおかあさんにつかまっていね」
でもおかあさんもいっしょにおちてしまいそう。

「おかあさん、こわいよ、おちちゃうよ」

「だいじょうぶ、そうだ、ねえめのん、あのうたをうたって。おかあさんのおしえてあげた、あのうたをうたって」

おかあさんのうたの中でおうたをうたった。

「二人てをつなげば、むすぶ。三人てをつなげば、一人ほどこいてむすぶ。四人てをつなげば、二つむすぶ。五人てをつなげば、一人ほどこいて二つむすぶ……ねえ、いつまで？」

それから、大きなてがおかあさんをむすんで、わたしをほどこいて、いつちゃった。

彩夏の送信ボックス

「冬菜」

8 / 16

大丈夫、安心してよ
全然終わってないから

(o ^ ^ o)

8 / 17

ふゆなはどうなのよ

(、o、)

8 / 18

私が好きにしてあげようか
まあ悩みがあるならいいなよ
友達でしょ

o (、、) o

8 / 18

ふゆなはふゆなだよ
それでいいじゃん

8 / 19

なにそれ？
もしかして帰省してるとか

8 / 20

ありがとー！

(、、)

やっぱりふゆなは心のともや！
会えないって、ナゼ（？！）？

8 / 2 1

ふゆなー、宿題終わった？

8 / 2 1

白状しなさいよ

8 / 2 2

私終わったからね！

8 / 3 0

どうしてそんなこと言うの

8 / 3 1

ふゆな、だめ

0 : 0 5

うまくなっただでしょ

冬菜の思い出2

冬菜は何だか不思議だった。

今までずっと近くにいたけれど、いつも何を考えているのかわからなかった。

他の子は仲良くなったらすぐに見えてくるのに、その子のときはそれがなかった。何も見えなかった。

だから人といるときに、いかにその人の心の模様を知ろうとしているか、私に感じさせてくれた。冬菜にはそんな不思議な力があると、私はそう思うよ。

私はいつもふわふわしていた。いろんな人と関わって、誰にでもおなじように接していた。それが当たり前のことで、人によつて態度を変えるより、その方がいい人間なんだと、私は思っていた。でも、冬菜にあつてからは違う。

彼女は私にしか言葉をくれなかった。誰にも口を利かなかった。私は何だか、それがかつこいいいように見えた。

この子は私よりもつと素直だ。そう思った。

冬菜は何だか不思議だった。

素直で、私なんかよりもずっと一途で、強かった。

彼女が私に与えた影響は、どんな偉い人の本を重ねても比べ物にならないくらい大きい。

人はもつと素直になるべきだと、私はそう教えてもらった。

でも、どうして？
あなたは素直なはずなのに。

千花の夢

母ちゃん、聞こえる？

何で、あたしの夢なんか言わなきゃいけないの？

ちよつと待つて、考えてみるから。……あたしの夢かあ、考えたことなかったもんな……。

じゃあさ、母ちゃんは何になりたかったの？

……お嫁さんにもらつてもろう人がないと……もしかして、ずっと一人だつたりしてねえ。

ねえ、母ちゃん、母ちゃんはお針子さん、いや？ 嫌じゃないの？

そうか、母ちゃんはお裁縫好きだったのか。

でもあたし、もし一人だつたら自分で稼がねばいけないのよね。そしたらちゃんと学校行つて、勉強して、先生とかになりたいわ。

そうよね、早く嫁にいかなば母ちゃん、大変よね。もろうてくれる人、いればいいけどね。

……カゼさん？

……カゼさんは、あの人は優しい人なのよ。男らしいし、ずいぶんいい人よ。

素敵な人なのよ。

でも、あの人は……。

冬菜の思い出3

先生が教卓を少し叩いた。

「おい、ちよつと静かにしてくれ」

ざわざわしたままの教室は、この学年始まって以来変わっていない。もうすぐ一年経つのに。

先生は体育教師、怒鳴りそうな顔しておいて、そういうことはあまりなかったし、中学の先生より怖くない。こういうときには、わりと黙って気持ちを伝えるタイプの、じわじわ後から怖い感じの先生だった。

携帯電話を右にずらすと、先生がそういうモードに入っているのがわかる。私は素直な子だから、すぐにケータイをしまった。

そうしてしばらくしているうち、無言に気づいた生徒達は、姿勢を正して先生の言葉を仰ぐ。

先生は静まりかえった教室に大きくため息をついて、話し始める。「みんな知ってると思うんだが、この教室にはあまりよくないことが起こっている」

あまりよくないことといえば、最近私の頭の上の蛍光灯が限界きてるってこと。目に悪い。

「これはみんなを責めているわけではないが、確かにクラスみんなの問題だと思う」

もしかして、いじめとかあったのかな。

……私ってやつぱり、冬菜みたいに素直じゃないよね。

「池崎冬菜は最近、学校をよく休むな……いわゆる不登校というやつだ」

先生は意外にも淡々と、そういうことを言う。かつこいい。

黙っていたみんなが、さらに静かになる。息も止めてる？

「これはあいつが一人悩んでいることなのか、それともお前達は何か知っているのか、池崎に話を聞く前にお前達に確認をとりたいん

だが、この時間はそういうことに使ってもいいか？」

何で先生は私達にそんなことを訊くんだろう。

でも誰だって、何も知らないって言うよね。どれだけの人がどれだけのことを知っているのかわからないけど、少なくとも、この教室には嘘つきが一人以上いるさ。

まず一人目、私。

黒い草原

どうしたの、ないてるの？

おかあさんがいないの？

まあ、おじょうちゃん、人の子ね。どうやってここまできたの？
へえ、おふねにのって？

まあ、あの川はふねでわたっちゃいけないって、さんざいったのにさ……。

かわいそうに、おかあさんいないんじゃない、おうちにかえれないねえ。

ここはまつくらであぶないから、もっとあかるところにいかうか、おばあちゃんといっしょに、ね？

あれ、どうしたの？

かくれんぼでもしたいのかい？

むらにいつてからまたたくさんあそべるよ。それにここはくさばかりはえていて、かくれんぼなんてできやしないよ。

あれ、きのところからだをまるめてるのかな？

どこかな、さあ、でてきて、おばあちゃんといっしょにいこうね。ここはあのまつくらなやつがおってくるからね、はやくにげようね。

かくれるところはないよ。

はやくおし、もうすぐだよ。

すぐそばだよ。

ここかな？

じゃあ、ここかな？

あ。

ほら、
みつけた。

黒い氾濫

筆で無理やり描いたような一筋の暗い川が、龍のうろこをこぼしながら流れていく。辺りが暗いせいか、川の色もあまりよく見えな
い。

「あきらくん、はやく逃げないと……来るよ」

痛みがあるはずの彼女は、さほど取り乱す様子もなく、不自然なほど落ち着いている。

「でもこの川、どうしよう……あれと同じ色をしてるから、あまり近づくと飲まれるよ」

「どうしてそんなことを知ってる？」

彼女はただ者ではない。僕はそんなふうに思った。

辺りを見渡す。その目も何かが違う。普通の女の子の目じゃないように思える。何かを知っているように。

第一、僕以外にもこの場所を知っているやつがいたとは、そこにまず驚きを隠せない。

ただ、今はそれどころではない。

「見える、あきらくん」

彼女は下流を指差す。濁流の穂先に大きな橋がある。弧を描く様子はこの川の流れにも負けない存在感を放っている。

「あの橋だろう」

「そう、あそこから逃げられる」

向こう岸に逃げたからといって、やつらが追うことを止めるわけでは無さそうだが。

森が燃えている。

「はやく、行こう。渡し守もそろそろ気がつくころでしょ」

川の中から黒い姿が這い上がり、三角の帽子をあらわにする。

繋がれている舟の横で手招きしている。曲がった腰に杖、陰の中に光る猫の目。

「目をつけられたら、どこまでもついてくるの。目を合わせずに
こう」

あやかは僕の手を引くと、走り出した。

架け橋

千花、聞こえる？

今ね、黒い川に橋を架けているよ。お前も見に来なさいよ。男達
が水に浸かって一生懸命になって石やなんかを積み上げているよ。

みんなあの子が悪いから、母ちゃんすごく辛いけど……したことは罰を受けるのが当たり前だよ。もうすぐ新しい命が連れてこられて、お前もちゃんとした人になれるね。

華是の坊やにもちゃんとお別れ言っておきなさいよ。

あなたが上に戻ったら、もう二度とこっちに来られなくなるんだからね。

今日も華是の坊やが薬を届けに来てくれたよ。本当に、だんだんいい男になってきて。

それに私は罪人の親だったのに、なんだってあんなに優しくしてくれるんだろうね。

でもね、かわいそうなことに、華是のところの下の娘さんが、橋渡しにされるそうだよ。

え、華是はなんて言ってたかった？

平気な顔して笑っていたけどさ、本当は悲しいでしょうよ。だつてずっと一緒にいた妹が、一生離ればなれになるっていうんだからね。

千花かい？ 千花なのかい？

どうしたんだい、こんな夜中に？

千花？ なんだい、聞こえないよ。

千花？ 千花！

あんた、華是の坊やを呼んで、千花が……！

春風祭準備

ねえ、教室の飾りつけ、聞いた？ 机は全部出すって。それで後ろと前の壁には段ボールに絵を描いて貼って、長机二つとか並べてそれを四つくらい作って……そうそう、黒板隠しちゃうって。

教室の外はどうするんだろうね、委員の人はあんまり言っただけで、多分なんか飾るよね。

そーゆーの聞くとなんか私らだけめっちゃ働いてる気がしない？ 委員の人は命令だけしていつも部活行っちゃうしさ。

……あ、みんな来る。

あ、そうであっくん、私ごみ捨ててくるね、ゴミ箱一杯だから。

ただいま……って、あれ？ みんなは？ さっきの声って装飾係の女子じゃないの？

なんだ、違っただんだ……。

あ、見て、夕日きれいだよ！

……どしたの？

え、私？

私は別に大丈夫だけど、あっくんこそ。毎日準備に来てるっていうし、遅くまでいて大丈夫なの？

てか、なんでそんなこと聞くの？ まだそんなに遅くないじゃん？ 五時半だよ。

まだみんな部活とかやってる時間だし、そんなに……

！！

あー……びつくりした。

何今の、悲鳴？ 誰かふざけてるだけでしょ。

どしたのあつくん、顔青くして……。

……あつくん？

一人ほどこれた？ ちょっと、変なこというのやめてよ、私そう
いうの苦手なんだから……。

あつくん？ ……ちよつ、あつくん？ どこいくの？

待ってよあつくん！

古びた看板

の橋渡る者 告ぐ

此 橋の結びけ は忌 れる者らの復讐 証なれば、あしたの命通
る ど、けふの命通 ず。

またさべきなれば、渡し守、あ たの命黒き へ落と む。

けふの命とほすはその命あけぼのより出 、あしたへむかふ きな
り。

けふにある き命に道示さんとて、あしたにあ る命にあはむ。
けふとあ たに生ま るは真意なり。

人なるあしたの命は人にあらず、影なるけふ 命は影にあらず。

影の望まんとするは、人に るなり。めでたきはけふの日があした
へ見事にむかふなり。

あしたの命

「ふゆな……どこにいるの？」

木がたくさんはえていて、遠くが真っ暗に曇っている。

その暗がりの中に消えていったふゆなの姿は見えない。

「ここよ、彩夏……」

笑い声が聞こえた。

だけど違う、これは。

「ふゆなの声じゃないよ、ふゆな、帰ってきて！」

風が肌を切りつけるのを感じる。どうしてだろう、真っ暗で何も見えない、それなのに全てが見える。何かが懐かしい。まるで前から知っている場所みたい。

「ちがうでしょ、彩夏……おもいだして、かえってくるのは、あなたでしょ……」

ふゆなじゃない。

「何いつてるの……もうやめて、ここから出して？」

私は黒い空に叫んだ。そして倒れた。誰かに押されたような感じがした。

「うそつき、うそつき、うそつき」

「見せてみなほら、それが一枚目の下で、二枚目は？ 二枚目はどこよ、どこにかくしてんのよー！」

「いつ……た……」

誰かいる。

「ふゆな……？」

ふゆなの影が見える。

私は彩夏だよ、本物の。

「さあ、こっちへきて、また昔みたいに遊ぼう?」

「昔、昔? 違う、私は……」

走り出した。

この暗がりから早く逃げないと、危ない。そう思った。

いつの間にか傷だらけだった。それでも構わずに逃げた。体のそこらじゅうに黒い何かが絡んでくる。

「痛い? 痛いよね……私が守ってあげる」

「やめて!」

ベッドから体が飛ぶように感じたのは、初めてだった。テレビとかでよく見る、夢オチだった。

「……でも、さっきの……誰?」

夢の最後にはあまりにはつきりと、男の子の姿があった。またそれも、懐かしいイメージがある。

『めーるだよっ
』

夜中の零時ちよつと過ぎのことだった。

千花

ああ、お前、そんなところで待っていたのかい？ 全く、また黒に飲まれたりしたらどうするんだい、華是の坊やはもう上に行ってしまったのだからね。

それよりそうそう、お前にいいものを連れてきたよ。かわいい女の子……本当に、お前にそっくりなんだよ……。
なんだい、嬉しくないのかい？ せつかくお前も人になれるというのに。

お前がちゃんと人になったら、戻ってきた華是の坊やはどんなに嬉しく思うだろう。母さんも嬉しいよ。

ほら、この……おや、おかしいね。

母さん、そこにあの子がいたと思ったんだけど……。

どこいったかな、ずいぶんと隠れん坊が好きな子供らしくてね。
どこに逃げても無駄なのに。千花が人になるためだったら、母さん何でもするからね。

どうしたんだい、顔色が悪いようだよ……。

千花、まさかあんた……妙な気になったんじゃないだろうね？

芽音

まって！

よかった、よかった……あなたがはしをわたっていたら、母ちゃんにつかまっただところだったよ……。

ねえ、あなた母さんと来たんでしょ？ 母さん……川に？

じゃあ姉ちゃん、母ちゃんがはしでまっっているのをしって……。

どうしよう……。

……そうだ、これ……これをもってにげて。

そう、きんいろのはり……それはあたしの母ちゃんがだいじにしているものなの。それをもってにげて、それから……それから、もっとおくの方ににげたら、どこかでまっていてね。

母ちゃんはきつとその宝もののいくとこをずっとつけていくと思うわ、母ちゃんがここに来るまえに、早くにげるのよ。

あんたが母ちゃんに見つかるまえには、きつとおいつくからね。気をつけていくんだよ、川の方はもうとじてしまっているから、ずっとおくの方ににげなさいな、わかったらさあ、いい子だから、早くにげるのよ。

……早く。

……あとは、あたしのまぼろしでござまかしておけば、母ちゃんの
目をぬすめるかな。

カゼさん、早く帰ってきて……。

実輪

懐かしい。

とても懐かしい。

暗い光が空から降り注いでいるのは、ここでしか見ることができない。

美しい私の世界。私の世界に帰ってきたの、私は……嘘の世界にはもうきつと戻らない。

だってお兄様の願いは、私の手ではなくて、芽音自信に叶えられようとしているんだもの。

私は少し心を落ち着かせた。

ここでなら、本当の私でいられる。

冬菜という殻がなくても、ここで生きていける。

……生きていけたのに……。

「嫌だよ……嫌だよお母さん……」

小さく泣く声が聞こえる。

見れば、小さな女の子が林の道を歩いている。

あの子が……芽音。

あまりに小さい。

あんなに小さい子をここに連れてくるとは、一体どんな人なのだろう。

でも、私も、冬菜の中にたまに出ていって、彩夏を連れてきたりした。

でも、ここでの私の目には、芽音しか映っていない。

彼女は私に気づいたか気づかないか、走り出した。彼女のすぐ背中には、黒い影がいて、光を吸いだそうとしている。

かわいそうに、どこまで逃げても、最後はみんな同じになるのに……。

そして、足元に何かを見つける。

金色に光る針。随分錆びてみえる。……ああ、そうか、私の目は冬菜の物だから……。

芽音の落とし物だろうか。

冬菜の受信ボックス

「龍大くん」

8 / 18

池崎さんて面白いね

8 / 18

嘘じゃない

お兄さんの話とか、何だか本当みたいで、俺は好きだ

8 / 18

え？

してたよ、昨日

もちろんフィクションだろ

8 / 18

信じるかよ

しかし俺は何だかホントのような気がする

8 / 18

二重人格とか？

8 / 18

ちよと怖い

8 / 19

今度どこか行きませんか

精神科とか笑

8 / 19

今日校庭で倒れてる奴いた
熱中症だて
最近多いぽ

8 / 25

仕方ないけど
どして??
俺悲しいT
T

0 : 02
すぐいく

きのうの命

妹はしばらく、俺の方を見ていたが、頭を下げると、おとなしく光の中に溶けていった。

叫びが聞こえた。うぶ声が聞こえた。

罪人達は、何も言わなかった。二人の罪人はただ、渦巻く光の入
り口を見下ろしている。

「あなたの妹は……どうして自ら橋渡しになったのですか」
罪を背負う女は言った。

「私達のような罪人と同じ様な結末を、彼女は望んでいたのでしょ
うか」

罪人の分際で、よくそのようなことを言えたもんだ。

その女の顔は、千花にもよく似ているように見える。俺の目に映
るものをも、あいつは変えてしまおうというのだろうか……。

あいつには、それだけの力があるのだろうか。

女は、頭を下げる。

「どうか、華是様、私どもに多くの罰をお与えくださりませ……私
は千花とは違うのです。それを知らずに、私は大罪を犯しました……」

……
何を思ったか、女は己の罪を語り始めたのだ。

その泣き顔までが、千花に似ている。

悔しい。

「お前はそうして、罪を軽くしようとしているのか……」
同情を悟られないように、俺はそのような言葉を吐いた。

千花の姉は何も言わずに、首を横にふった。

「私はただ……申し訳ないように……」
嘘に決まっていた。

悪いのは俺だ。

この女の夢術にだまされた、俺が全ての始まりだ。

「恨んでいるなら、恨め。俺は……お前に恨まれて然るべき人間だ」
光の渦が足元から火の粉をあげる。

「僕は、あなたを恨みません。どうせ、色情に負けた身ですからね、
あなたを恨むまでもない……この女のように、あなたに近い存在で
もない……だから僕は、先に行きます。恨むならば、千花様の美し
さを恨みますよ」

それは男の声だった。

突然にしゃべくると、男は腐った足袋たびのまま、光の中に混ざり込
んだ。

つぶ声が聞こえた。また一人、新しい罰が与えられた。

「私には、強い罰をお与えください。その代わり、あなたがそれを

悔やまないよう、私は懸命に……あなたを恨みます」
女の目はしっかりと、こちらを見据えていた。

恐ろしささえ感じていた。

千花に似すぎている。

「それでは、さようなら、私の愛しい人……」
彼女は笑った。

千花は光の渦の中に、滑り落ちていく。

瞬間、糸で結ばれているように、俺の体は千花に引き込まれた。

「千花……千花！」

気付けば、光の中に紛れていく彼女を追いかけていた。

わかっていた。彼女は千花ではない。しかし、足は勝手に動いた。

「華是さん、ここよ、聞こえる」千花の声だ。

「どこだ、どこにいるんだ」

俺は叫んだ。

「ここよ、闇の中に……助けて、暗くて……寒いの」
闇の中から聞こえる、その声が千花だ。

闇の奥に、千花の笑顔が見える。

「ごめんな、千花、今すぐそこに行くよ……」
もうすぐ、手が届きそうだ。

闇の中に体が飲まれていくを感じた。暖かい、千花の闇の中だ
った。

彼女の姿はない。

ただ、温もりだけが、満たしていく。

「千花……千花じゃない……」

体が叫びと共に、下に引きずりこまれる。

無になっていく。

耳の中に声が届く。

「懸命に恨みます、あなたが悔いることのないように……」

実輪と千花

村はさびれていた。

いつの間に、こんなふうになったのだろう。

いつの間にといつても、私はついに冬菜でしかなくなってしまった。

本当の私であっても、私はずっと冬菜でいなければいけない。

だから、それだけ、私が冬菜に近くなってしまったということなんだろう。

「誰？」

声が聞こえた。聞いただけでわかる。お義姉さま（おねえさま）でしょう。

「こんにちは、お義姉さま……お久しぶりですね」

私は言つて、礼をして見せた。

お義姉様は私を見て、何も言わない。

「お義姉さま、私がわかりますか……」

「……うん、わかる。実輪ちゃんでしょ」

お義姉さまはさすがに夢術師、私の考えることがわかっていているみただった。

私は、お義姉さまが大嫌い。

「ねえ……実輪ちゃん、あの子……私の対、あんたが連れてきたの？」

いいえ、違うわ。

「違います、私は……お兄様の喜ばれることなら、何でもするつもりだったけれど……もうお兄様はいないもの」

お義姉さまの瞳が揺れた。

きれいな瞳。

誰でもその幻で、誘いこんだ……。

私はあなたが大嫌い。

全て嘘でできているのだから。

「華是さん……華是さんが……」

涙も、嘘だ。

お義姉さまは崩れ落ちると、声をあげて泣いた。

泣けばいい。

嘘をつき続けたあなたの末路よ。

でも……お兄様は泣くあなたの顔を、見たくはない。

私にはわかる。

「お兄様は、邂逅^{かいこう}していたわ……もしかしたら、あの人が自分を悔いて、自らそうしたのかもね……」

「華是さんに……会ったの？」

「ええ……でも、すっかりお兄様とは違ってしまっていた。でも、あの中にお兄様はいるのよ……」

お義姉さまはすぐに、泣くのをやめた。

本当は私もわかっていた。

あなたがどうして、お兄様に深く愛されたのか。

お兄様は、あなたの幻を愛したのではない。

幻でつくろうことを知らない、あなたの純粋な心に、惹かれたのよ。

お兄様は、幻にだまされるような、そんな人じゃないもの。

「私、闇に飲まれてもいいと思ってた」

あなたは言った。その声は強い。

「私は、それで全てが終わるなら、闇に飲まれればいいと、ずっと思ってた……でも、違う」

小さく、あなたはうなずいた。

「華是さんは、私のために愛するあなたを、地上に向かわせたんだから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6438y/>

尋ね人の欠片

2011年12月27日19時48分発行